教育委員会会議の議事録（平成 30 年 9 月定例会）

◆　日　　時　平成３０年９月１８日（火）午後６時１５分から午後７時１６分まで

◆　場　　所　教育局第１会議室

◆　出　席　者

教　育　長	佐　々　木　洋	欠席
委員・教育長職務代理者	吉　田　利　弘	出席
委　　員	齋　藤　道　子	出席
委　　員	加　藤　道　代	出席
委　　員	花　輪　公　雄	出席
委　　員	中　村　尚　子	出席
委　　員	里　村　正　治	出席

◆　会議の概要

１　開　　会

２　議 事 録 承 認　　７月臨時会及び定例会

３　議事録署名委員の指名　花　輪　委　員

４　報　告　事　項

（１）平成 30 年度仙台市標準学力検査、仙台市生活・学習状況調査の分析結果と改善方策について

（学びの連携推進室長　説明）

資料にもとづき報告

中　村　委　員　19 ページ中学校２年生の国語の課題として「文学作品の内容を読み取る」というところが、黒丸１、２となっているが、上の表を見ると「文学作品の内容を読み取る」のところは、目標値と仙台市の平均正答率が一番下の作文と比べて、それほど差がないように思う。作文のほうが目標値と差があるようだが、この点の説明をお願いする。

学びの連携推進室長　取り上げる課題は、各教科２つほど選んでおり、「文学作品の内容を読み取る」のところでは、全体的にはよいものの、設問ごとに見ると課題があることから、国語科の検討委員が分析し、国語の課題として選んでいる。確かに作文のほうも大きい課題となっており、中学校２年生にとどまらず、全て学年における課題ということで、別なところで触れながら、今回中学２年生の国語では「文学作品の内容を読み取る」が、国語の根幹でありながらも少し落ちているため、大きく取り上げている。

中　村　委　員　あと２点ほど教えていただきたい。23 ページ、中学校２年生の英語と、28 ページ、中学校３年生の英語のどちらも「場面に応じて書く英作文」が課題に挙がっている。これは２年生も３年生もそこが弱いということなのかが１つ。

次に資料４の３ページに、各児童会や生徒会を中心に、各校のスマホ利用のルールづくりに取り組んでいるとある。去年もこの言葉があったと思うが、取組んでいる学校数は増えているのか教えてほしい。

学びの連携推進室長　23 ページと 28 ページの英語で指摘のあったとおり、その部分が英語における大きな課題である。決まったものであれば子供たちは英語を使えるのだが、それを状況に応じてということになると、うまくできない。これを２年生と３年生の英語の課題と受けとめている。

続いて、生活・学習状況調査の３ページのスマホ関連については、昨年度から引き続きスマホ利用について、我々大人が一方的にルールを押しつけるのではなくて、子供たちの発達段階を考えて、自分たちでマイルールをつくっていくということが有効であると、学校に伝えている。これについては、取組んでいる学校と取組んでいない学校の温度差があるので、引き続き啓発することが必要なことから、今回も取り上げている。取組んでいる学校数は把握していないが、新しくアプリの使用数と学力の関係も見えてきたところなので、引き続き啓発していく必要があると思っている。

齋　藤　委　員　標準学力検査、生活・学習状況の双方で指導改善の方策を見ると、仙台市の確かな学力研修委員会の先生方が、非常に事細かに分析していると感じる。是非とも全市内の小中学校の先生方に周知していただいて、勉強の糧としていただきたい。

資料４の学習状況調査の最後にある星印の「ご家庭では」は、保護者の方々が読んで非常に勉強になる言葉が多く書かれているので、重点的に目立つように示していただきたい。

気になったところとして、この資料４の２ページや３ページに、「たく生き授業プラン集」と出てくるが、「たく生き」の正式名称である「たくましく生きる力育成プログラム」を注釈等で記載したほうがいい。

もう１点、２ページ目の指導改善の方策の１つ目と２つ目、どちらにも「たく生き授業プラン集」との記載があるが、下のほうが「たく生きプラン集」になっているので、どちらかに統一したほうがいい。細かいことだが、保護者の方たちが見て分かりやすいようにしていただければと思う。

学びの連携推進室長　こちらの分析結果、改善方策の活用については、各学校、一人一人の先生方が活用しているかどうかが課題になる。今年６月に学力担当者研修があり、各学校から学力担当者が集まった際に活用状況を聞いてみたところ、８割くらいの学校で回覧しているが、授業での活用という点は低いことが分かった。結果をまとめて終わりではなく、各学校に提供する際には活用を促す文章を添付している。例年以上に活用が進むことを期待している。

２ページの「たく生き授業プラン」は、確かに保護者にとってはまだ馴染みがないと思うので、表記については注釈をつけるなどの工夫を検討する。また、指摘があった文章は訂正を行う。

花　輪　委　員　仙台市の標準学力検査は、科目ごとに分析されているが、ほとんどが目標値を達成している。一つ一つの項目を見ると、先ほど他の委員から指摘があった点が心配されるというのはあるが、全体を見ると、こちらが想定している目標値をほとんど超えて

いる。先生方の大変な努力の成果があらわれていると思う。また、仙台市の生活・学習状況調査で比較されているが、震災前あるいはここ数年でも、いずれも望ましい方向にパーセントが上がっている。これも非常に先生方の努力があらわれていると思った。

そういう中で、理科が少し気になる。小学６年生、それから中学１年生は目標値を５ポイント上回っているが、中学２年生、中学３年生は目標値を下回っている。ほかの教科よりも系統的な傾向があるように思える。先ほど、実験や観察、あるいは日常生活との比較の中から理解するところが弱いという指摘があった。やはり物事の理屈がわかると、非常に楽しくなると思うので、これを理解すると身の回りの生活で起こる様々なことが理屈立ててわかり、非常に楽しくなる。そういったところの興味、面白さといったものを伝えるような取組みをお願いしたい。そのために、小学校でも専任教員が担当するという試みをされていると聞いている。理科は実験などがあり、得意な先生が各学校におられると思うので、得意な先生が専任で担当する、あるいは実験等を補助していただけるような専任教員を配置することも考えてもいい。理科は積み重ねが大切であって、初めにつまずくとなかなか戻れなくなることが心配なので、できるだけ低学年の頃から丁寧な対応をしていただけるとありがたい。

学びの連携推進室長　理科分野は若干心配になった点が幾つか出てきており、その部分は丁寧に、今後も分析を加えて指導改善に生かしたいと思っている。指摘のとおり、前回の教育委員会で報告した全国学力テストの分析でも、理科の授業で実験と実生活の関連が弱く、学校質問紙の中で実生活と結びつけた授業の展開の工夫をしているかという点で、仙台市が少し落ちていることがわかっている。また、14 ページの小学校理科で対照実験の達成率が少し下がっている。この辺の見えてきた課題について、丁寧に各学校に返して、一人一人の先生が自分の授業に生かすことが大切だと考えている。そういう点では小学校でも理科の教科担任制を行っている学校が増えてきているし、今年３月に策定した確かな学力育成プランの中でも、理科に焦点を当てて観察・実験のワークシートを作ったりしながら、特に生物領域の部分が弱いということがわかってきたので、そういった手助けを考えている。

それから、人的サポートということで、教育センターの理科学習アシスタント制度を活用しながら、自校の理科の学習を充実させることによって、理科好きの子供も増えていくと思うので、総合的に取組んでいきたい。

加　藤　委　員　感想になるが、１つ目はこの学力検査が仙台市の子供たちの学力の傾向であるとされているが、テストという答えのあるものを解くという制限の中での学力だと思う。もちろん高いほうがいいのだが、全体としてこの分析の中で読み取る力という言葉が繰り返し強調されている。国語の文章を読み取るだけではなく、例えば算数についてもグラフを読み取るとか、社会についても資料を読み取る、あるいは問われている問題文を読み取るということも全部含めて、読み取る力というのが強く求められるのがテストだと思う。

読み取る力とは、求められている情報を正しく吸収するということなので、この能力が高まればテストの点数は高くなる。もちろん大変重要な能力であるが、子供たちが本当の意味でバランスよく育つということを考えたときに、既にあるものを読み取るとか、一定基準に合わせていく能力だけではなく、自分の頭で考えたり、自分の言葉で表現したり、答えのない分野での能力も非常に重要だと思う。

これは今回の分析に何か物を申しているのではなく、子供というものを理解していく、トータルで把握していくときに、こうした読み取っていくことで点数になる部分だけではなく、自分の頭で、ないところから生み出していく能力も含めて考えてあげたいと思う。この学力検査イコール子供の能力ということではないかもしれないということを、改めて理解しておきたいと思ったことが１つ目である。

もう一つは、これまでの話の中に出てきた現実世界、日常生活とのつながり、実感という部分である。これは理科の件で話が出ていたが、やはり社会でも算数でも、日常生活や現実世界と学んでいることがどうつながっているのか分からないと、知識は定着していかないだろうし、何より先ほど言った自分の頭で考えるという意味で言えば、新たな問いを自分から生み出す力につながりにくい。１つ知識が入った段階で、次に知りたいことを生み出せるかどうかは、やはり実感と強くつながっているのではないか。この点を分析の中で非常に重要だと指摘していただいたことが、大変ありがたく、ここのところに期待している。

学びの連携推進室長　学力テストで測れるものは子供たちの学力の一部であるという見方は、忘れてはいけないと考えている。それを踏まえた上で、今回の学力テストの結果を見てみると、指摘のあった子供たちが自分で考えて、自分の言葉で表現する、自分で読み取ったことをまた整理する、こういった部分が若干不足していることが改めてわかった。全国学力テストの中でも、子供たちが学んだことを生かして、次の課題につなげていく部分が、取り組みとしても弱いことがわかってきたので、この部分は学校に対して働き掛けていかなければいけない。

学校で学んだことは、実際の生活で生かすような応用的、活用的な場面で、基礎基本がしっかりと定着すると思うので、実感を伴って、自分の興味関心に基づいてやっていくことも、学校の中で大事にする必要があると考えている。

里　村　委　員　学力テストの限界、あるいは学校で学ぶのは、実は知識ではなくて、生きていく力だという考え方には非常に賛成である。

この学力テストそのものについていくつか質問させてもらいたい。１つは、理科の話題で 10 ページの小学校５年生の部分である。黒丸の２、「自然の中の水」ということであるが、この図を見る限りでは、平均正答率は目標値を大きく上回っているが、これは何かの間違いか。

それから、同じように 14 ページの小学校６年生の理科の部分で、一番下にある顕微鏡の使い方は目標値を大きく下回っているが、成果と課題にピックアップされていない。顕微鏡の使い方がこんなに悪いということは、それぞれの小学校に顕微鏡が備わっているのか。また、備わっているのであれば、授業で顕微鏡を使っているのかどうかを調べればいい話で、使っていないようだったら徹底させればいい。何もそんな大きな問題ではないと思うが、分析が画一的になっている感じがした。

学びの連携推進室長　10 ページで指摘があった「自然の中の水」という項目全体では目標値を上回っているが、項目の中に結露の仕組みについて考える問題に課題があった。総合的には、「自然の中の水」では目標値を上回っていたが、その中で特に結露に関するところが大きく下がっていたということで、課題としている。

それから、14 ページの顕微鏡の使い方は、何度か理科の課題として上がってきており、理科部会の先生方でも今年度も取り上げるかどうかをかなり議論していただいた。過去の指導改善事例に取り上げたこともあり、今年は過去の指導改善事例を学年ごと、

教科ごとにまとめて、各学校に示しているので、過去と同じつまずきについては、改めて指導改善事例を見れば、生かせることになった。そのため、今回は新しい課題として、顕微鏡の使い方でなく、流れる水の働きを取り上げたところである。

なお、顕微鏡については、各学校できちんと数もそろっている。ただ、過去の指導改善事例では、やはり１回の実験で終わるのではなく、繰り返しいろいろな場面で継続的に使うことが大事ではないかという、指導改善事例を紹介している。

里　村　委　員　結露の問題だが、全体的には「自然の中の水」というのは、目標値をはるかに上回る正答があった。であれば、ここを課題とする判断に、少しバイアスがかかっていると思う。結露に関する仕組みの理解が乏しいという分析は正しいと思うが、それはそれで各学校にお話しすればいい話で、全体のまとめの中にこうやって、項目中の個別案件まで入り込んで、項目としては正答率が目標値より高いにもかかわらず指摘するということに少し違和感を覚える。

それから、顕微鏡については、何も難しい議論をしなくていいので、使わせればいいだけの話だ。そういう意味で課題として書かないでもいいが、やはり全体の正答率が 65.5％と下がっているのは、顕微鏡の使い方だ。子供の知識が悪いのではなくて、先生がもう少し教えればいいだけの話なので、それまで含めて正答率が低いとジャッジすることにも、少し違和感があった。出てきたものを、もう少しきちんと分析した上で、課題をえぐり出すという努力を続けてほしいと思う。

それから、あと２つ質問があるのだが、目標値の設定というのはどうやって決めるのか。もう一つの質問は、この結果を各学校に還元すると伺っているが、そのときに学校毎の結果も還元するのか、それとも仙台市全体の結果だけを還元するのかについて教えていただきたい。

学びの連携推進室長　結露の問題については、表現自体が不十分なため、どの部分が課題となっているかはっきりわかるような形で、文章を改めたいと思う。

続いて目標値であるが、まず目標値というのは仙台市標準学力検査において、学習内容が定着しているかどうかを判断する一つの目安となる指標であり、結果の評価に当たり、一定の具体的かつ客観的基準としている。これを設定するにあたり、正当性を高めるためのプレテストを実施し、問題の妥当性等について、標準的な時間をかけて学んだ場合に、これを正答できることを期待した児童生徒の割合として客観的に定めたものである。

里　村　委　員　プレテストをやったということだが、今の説明だと目標値自体の客観性にすごく疑問を持つ。なぜかというと、この調査は、正答率と目標値の乖離について分析している。したがって、目標値が科学的なものでなければ、比較しても意味がない。だから、目標値の設定はどうやって決めるのかというのを聞きたかったのだが、プレテストの結果で決めるというのは、科学的ではない。

一方で、分析結果を見ていると、項目によって目標値にばらつきがある。そのばらつきに沿って、正答率もある程度パラレルに動いている。したがって目標値の設定はある程度の根拠があって出していると考えているが、先ほどの説明では、目標値と比較して何の意味があるかと聞かざるを得ない。もう少し、誰にでもわかるように説明できるようにしないと、これだけの時間と労力をかけて調査することに何の意味があるのかと疑問を持ってしまう。

学びの連携推進室長　この目標値の科学性、正当性が揺らいでは、分析自体にも疑念が持たれるので、先

ほど説明したとおり、学習指導要領に示された内容について、標準的な時間をかけて学んだ場合に、設問ごとに正答できることを期待した児童生徒の割合を示している。さらに目標値の精度を高めるために、プレテストなどを行っている。また、設問ごとに正答率の上下が出てくるのは、問題の難易度に差があるためである。

里　村　委　員　それは先生方が長年の経験で、これが正しいと科学的に迫っているのだが、初めて聞く者にとっては科学的ではない。経験や勘で目標値が設定されている。それ自体がまずいということではなく、目標値と正答率の乖離を単純に比較して分析するのではなく、もう少し実のあるような分析に直していく道はないだろうかと思う。前年もやっているということで、何の見直しもされずに続いているのではないか。あえて言えば、目標値と市平均の正答率の乖離が大きい部分を持ってくるだけでなく、正答率が目標値を超えていても、絶対的に低いものなどにも着目をすべきだと思う。

教育長職務代理者　花輪委員に調査のあり方、目標値の設定についてのご意見を伺いたい。

花　輪　委　員　目標値に関する私の理解は、学習指導要領で決まっている項目について、設問を作り、これに対してある別の集団で、あらかじめこの試験に答えてもらう。そうすると、その問題に対する別の集団の正答率が出てくるので、それに対して、仙台市はそれよりも例えば５％いいところに目標値を設定しようというように決めていると理解している。

学びの連携推進室長　初めにプレテストではなくて、まずはこれぐらい正答するだろうという割合を決める。そして実際にプレテストを実施した結果で修正し、精度を高めていくという手順で行っている。さらに期待を込めて、まさに花輪委員が言ったような形で目標値を設定している。

　この標準学力検査は平成 19 年度から始まり、10 年以上過ぎたということもあり、今年の３月に確かな学力育成プランをつくって、学力の捉え方についても仙台市として見直しを図ったところである。今後、そういった面も含めて、標準学力検査、いわゆる独自の学力検査のあり方についても、検討する時期が近づいてきていることから、事務局内での議論も含め、今後のよりよいあり方について考えていきたい。

里　村　委　員　目標値の設定の仕方についてはもう少し明確に答えられるように準備しておかないとまずいと思う。プレテストというのは、仙台市内の学校でやるのか、全国的にやるのかという点も聞きたい。

　それから、目標値を設定するときに期待を上乗せするというのは、項目ごとに変えているのか、一律で５％足すのかどうかも聞きたい。

　また、これを学校に還元したときに、先生が授業にどう活用するかが重要だと思うので、全体結果の還元だけではなくて、各学校の結果も還元してもらうと、仙台の他の学校ではこの項目はいいが、うちは悪いのでここに力を入れる必要があるということがわかるので、こういう調査の最終的な目的は、個々の学校で改善活動につながるかどうかである。

教育長職務代理者　いわゆるフィードバックの仕方について説明をお願いする。

学びの連携推進室長　学力検査の結果については、全体的な傾向を示して、各学校においてどの設問が落ちていたかということの分析を進めている。そして、そのときに我々が示した指導改善事例を参考にしながら、その部分を高めて、まさに目の前の一人一人の児童生徒の学力を高めるために活用している。

　また、目標値の設定の仕方について、プレテストの結果を見て、これは想定してい

た以上に難しいという場合は低くするなど、その辺は設問ごとに丁寧に検討して精度を高めているところである。

里　村　委　員　目標値の設定について、丁寧にという説明があったが、何の根拠もなく５％足したり、足さなかったりしているのは、丁寧ではなくて恣意的ではないか。そのように設定した目標に対して、その差を分析しているのだから、事実とは違う結果が出てくる可能性もある。

それから、この還元は、それぞれの学校ごとの数字を還元するのかを聞きたい。

教育長職務代理者　還元のあり方について説明をお願いする。

学びの連携推進室長　各学校の平均を示している。なおかつ児童生徒一人一人の個票を基に自分はどこが落ちているかを見て、そして改善を図るということに努めている。

里　村　委　員　学校ごとに、正答率と目標値の乖離を示さないと、市全体の結果を還元しても、モチベーションにならないと思う。だから学校ごとに、ほかの学校はいいけど、うちの学校はここのところは劣っているから、今度頑張ろうと先生方で話すようにもっていかないといけないので、その辺のところをきちんと聞きたい。

それからフィードバックし、各学校で受け取った後に、学校ごとの改善策を市教委に出すことまでやらないといけない。結果を投げて終わりではなく、先生方が話し合って、うちの学校をよくするために、知恵を絞らないといけない。そうしないと、いつまでも同じ項目、例えば顕微鏡の使い方がマイナスになる。だから、調査の仕方と還元の仕方について、たくさん要改善点があるように私は受けとめた。

学びの連携推進室長　各学校には学校ごとの結果票のほかにも、学年ごとの結果票、さらには個別の児童生徒一人一人の結果票も還元している。それによって各学校で自校の実態を分析できる形にしている。なお、各学校においては改善策について、学年ごとにまとめて市教委に提出している。

里　村　委　員　では、その改善策を受け取った市教委では、改善の動向を見ながらどう対応しているのか。

学びの連携推進室長　市教委は各学校の変化より、全体的な状況を把握することを一番初めに行っている。それで、なおかつ学校ごとに課題がある部分については、例えば具体的に市教委のほうで取組んでいるサポート事業等を手当てしながら、学力向上につなげることを、学校と市教委が連携して行っている。

学校教育部参事　目標値について補足をさせていただく。プレテストはテストの委託業者が、統計的に成立するような数として他都市で大体3,000人ぐらいが実際にテストを行って出てきた正答率を基準に、それと実際のテストを行ったときの乖離状態を加えるということ、その委託業者が持っている膨大な過去問のデータを加味して修正を加え、より精度を高めたものとして設定されたものである。この方法は、文部科学省が、かつて学習指導要領の定着度合いを見るために、設定通過率という求め方をしたことがあり、いかにして学習指導要領が定着しているかという度合いを、大まかな目安で決めた。ただそれは余りにも大まかなものなので、プラスマイナス５ポイントを許容範囲として設定しているものである。本市もプラスマイナス５％を大きい枠の中で捉えていて、その中での変動については一喜一憂しないという形で押さえている。

なお、先ほどの各学校への還元であるが、子供たち一人一人の学力の定着度合いをしっかりと見ていきたいので、かなり詳細なデータを各学校に提供している。もちろん個人、家庭にも二者面談、三者面談を通した中で、子供の課題を一つ一つ丁寧に説

明した上で、子供への改善を促すというやり方を行っている。各学校では６月中旬にこの結果が還元されるので、教科ごと、もしくは学年ごとに分析をして、夏休み中に課題改善をしっかりと各学校でまとめ、また１年間の取組み評価をし、そして学校での新たな学力向上プランを提案して、それを保護者に説明する。市教委にも提供し、市教委はそれを前年度との比較の中で訂正、もしくは課題があれば、さらに指導に入るという動きをして、ＰＤＣＡサイクルがしっかりできる形で、それを個人でも学校でも市教委でも、きちんとサイクルに乗せていくやり方を続けており、定着しつつあると思っている。

（２）教育委員会委員の任命について

（総務課長　説明）

口頭で報告

（質疑無し）

５　　閉　　会